

Ⅱ-D 解答

問1. (模範解答)

(A) ではエリクソンのモラトリアム概念が紹介されている。産業化の発展に伴って経済的余剰が生まれ、その結果、社会的な義務を免除された青年期が生み出された。その時期がモラトリアムである。モラトリアムはアイデンティティを確立するための準備期を意味しており、その時期を経て、青年は社会の役割構造の中に自分にあった位置を見いだすことができると考えられている。これに対して、(B)、(C)、(D)は、現代日本の若者の実態をそれぞれの視点から描いている。(B)の説明によると、若者の親との同居が増加しているのは、未婚者が豊かな生活を送るために、親に住居費などの生活費を依存し、自分の収入を趣味などに使おうとするものの帰結である。著者は、これらの若者をパラサイトシングルと呼んでいる。パラサイトシングルは昔の居候のように恥ずかしいこととは見なされず、その時期が長期化することで、モラトリアムの常態化が生じている。一方(C)と(D)は、パラサイトシングル現象を比較的肯定的、楽観的に見る(B)の視点に対して、その現象を別の視点から論じている。(C)は、現代日本において、親と同居する若者が増えていることを扱った新聞記事である。そこでは、同居の原因を、若者の未婚化、晩婚化や、経済的不安定さに求める説が紹介されている。また、(D)の説明では、パラサイトシングルは一見豊かな若者の姿を彷彿させるが、反面、その増加は長期的に安定した生活基盤を持たない若者の増加を意味している。かつては、モラトリアムは青年期の一時期の問題であり若者はいずれ親から自立化していくものと考えられたが、今日の日本では若者の自立のための基盤が欠けているために、自立できない若者の長期的な貧困化が避けられないと著者は指摘する。そして、そうならないために、若者が自立できるような社会構造の確立が必要だと主張している。

問2. (解答のポイント)

エリクソンにおいてモラトリアムは青年期の一時的な現象であり、いずれアイデンティティを確立して自立していくものと考えられた。それに対して、今日ではモラトリアムの常態化が進んでいる。モラトリアムの常態化は、働きたくない、あるいは働くことに適応できない、また働いても親元から離れないなど、若者の側にその要因を求める見方がある一方で、定職に就く機会が少ないなど社会構造の側にその要因を求める見方が一方にある。前者は、フリーターやニート、あるいはパラサイトシングルなど、現代の若者を象徴する言葉に典型的に示されているし、後者は、格差社会など現代社会の特徴を示す言葉に表されている。これらの現象などをふまえながら、現代の日本社会における若者のあり方を、エリクソンのモラトリアム論と関連づけて、自分の経験、あるいは現代社会についての関心や知識に基づいて論述することが求められる。

問3. (解答のポイント)

若者の自立を助ける対策として、例えば以下のようなことが考えられる。

職業経験、職場見学、アルバイト経験

地域社会の人との交流

卒業生との交流

ボランティア経験、

長期のホームステイや合宿、研修

奨学金制度の充実

上記のものはあくまで模範例であり、個人的な経験などを含めて、それ以外の例であってもよい。また、それぞれの事例の意義を肯定的に論じるだけでなく、その問題点を論じてもよい。